

森  
鷗  
外

護持院原の敵討





護ご持じ院いん原がのは敵ら討



播磨国飾東郡姫路の城主酒井雅楽頭忠実の上邸は、  
はりまのくにしきとうごおりひめじ  
 江戸城の大手向左角にあった。その金部屋には、いつ  
うたのかみただみつ かみやしき  
 も侍さむらいが二人ずつ泊ることになっていた。然るに天保四  
みずのとみ とし  
 年癸巳の歳十二月二十六日の卯うの刻過すぎの事である。当  
ただ  
 年五十五歳になる、大金奉行山本三右衛門と云う老人が、  
おおかねぶぎよう  
 唯一人すわっている。ゆうべ一しよに泊る筈はずの小金奉行  
びき  
 が病氣引びきをしたので、寂しい夜寒よさむを一人で凌しのいだのであ  
そば  
 る。傍そばには骨の太い、がっしりした行燈あんどうがある。燈心に  
だいだいろ  
 花が咲いて薄暗うすくくなった、橙黄色だいだいいろの火が、黎明しのめの窓の明

りと、等分に部屋を領している。夜具はもう夜具葛籠つづらにしまつてある。

障子の外に人のけはいがした。「申し。お宅から急用のお手紙が参りました」

「お前は誰たれだい」

「お表の小使でございます」

三右衛門は内から障子をあげた。手紙を持って来たのは、名は知らぬが、見識みしった顔の小使で、二十はたちになるかならぬの若者である。

受け取った封書を持って、行燈の前にすわった三右衛

門は、先まず燈心の花を落して搔かき立てた。そして懐ふところから鼻紙袋を出して、その中の眼鏡めがねを取って懸かけた。さて上書を改めたが、伴せがれ宇平の手でもなければ、女房にようぼうの手でもない。ちよいと首を傾けたが、宛名には相違がないので、とにかく封を切った。手紙を引き出して披ひらき掛けて、三右衛門は驚いた。中は白紙である。

はっと思つたとたん、頭を強く打たれた。又驚く間もなく、白紙の上に血がたらたらと落ちた。背後うしろから一刀浴せられたのである。

夜具葛籠の前に置いてあつた脇差わきざしを、手探りに取ろう

とする所へ、もう二の太刀たちを打ち卸して来る。無意識に右の手を挙げて受ける。手首がばったり切り落された。起ち上がって、左の手でむなぐらに掴つかみ着いた。

相手は存外卑怯ひきような奴やつであつた。むなぐらを振り放し科しなに、持っていた白刃しらばを三右衛門に投げ付けて、廊下へ逃げ出した。

三右衛門は思慮いともの違ちがもなく跡を追つた。中の口まで出たが、もう相手の行方ゆくえが知れない。痛手を負つた老人の足は、壮年の癖者くせものに及ばなかつたのである。

三右衛門は灼やけるような痛いたみを頭と手とに覚えて、眩暈めまい



が萌きざして来た。それでも自分で自分を励まして、金部屋かねべやへ引き返して、何より先に金箱の錠前を改めた。なんの異状もない。「先ず好かつた」と思った時、眩暈が強く起つたので、左の手で夜具葛籠を引き寄せて、それに靠より掛かつた。そして深い緩ゆるい息を衝ついていた。

物音を聞き附けて、最初に駆け附けたのは、泊番の徒かち目附めつけであつた。次いで目附が来る。大目附が来る。本締もとじめが来る。医師を呼びに遣やる。三右衛門の妻子のいる蠣殻町かきがらちようの中邸なかやしきへ使が走つて行く。

三右衛門は精神が慥たしかで、役人等に問われて、はつきりした返事をした。自分には意趣遺恨を受ける覚おぼえは無ない。白紙の手紙を持って来て切つて掛かつた男は、顔を知つて名を知らぬ表小使である。多分金銀に望のぞみを繫かけたものである。家督相続の事を宜よろしく頼む。敵かたきを討うつてくれるように、俵もらに言つて貰もらいたいと云うのである。その間三右衛門は「残念だ、残念だ」と度々たびたび繰り返して云つた。

現場げんばに落ちていた刀は、二三日前作事の方に勤めていた五瀬某が、詰所つめしよに掛けて置いたのを盗まれた品であつ

た。門番を調べてみれば、卯刻過うのこくに表小使亀蔵かめぞうと云うものが、急用のお使だと云って通用門を出たと云うことである。亀蔵は神田かんだ久右衛門町代地の仲間口入宿富士屋治三郎が入れた男で、二十歳になる。下請宿したうげやどは若狭屋わかさや亀吉である。表小使亀蔵が部屋を改めて見れば、山本の外四人の金部屋役人に、それぞれ宛てた封書があつて、中は皆白紙である。

察するに亀蔵は、早晚泊番の中の誰たれかを殺して金を盗もうと、兼かねて謀はかっていたのであろう。奥羽おううその外の凶きよう歉けんのため、江戸は物価の騰貴した年なので、心得違こころえちがえの

ものが出来たのであろうと云うことになった。天保四年は小売米百文こうりまいに五合五勺ごごうごしやうになった。天明てんめい以後の飢饉年ききんねんである。

医師が来て、三右衛門に手当をした。

親族が駆け附けた。蠣殻町の中邸から来たのは、三右衛門の女房と、伴宇平とである。宇平は十九歳になっている。宇平の姉りよは細川長門守興建ながとのかみおきたけの奥に勤めていたので、豊島町としまちようの細川邸のちぞいから来た。当年二十二歳である。三右衛門の女房は後添のちぞいで、りよと宇平とのためには継母である。この外にまだ三右衛門の妹で、小倉新田こくらしんでんの城主

小笠原備後守貞謙おがさわらびんごのかみさだよしの家来原田某けらいの妻になつて、麻布日あざぶひが窪くぼの小笠原邸おがさわらにいるのがあるが、それは間に合わないで、酒井邸には来なかつた。

三右衛門は医師が余り物を言わぬが好いと云うのに構わず、女房子供にも、役人に言つたと同じ事を繰り返して言つて聞せた。

蠣殻町の住いは手狭で、介抱が行き届くまいと言つたので、浜町添そえやしき邸かんべの神戸某方で、三右衛門を引き取るように沙汰さたせられた。これは山本家の遠い親戚しんせきである。妻子はそこへ付き添つて往つた。そのうちに原田の女房も来

た。

神戸方で三右衛門は二十七日の寅とらの刻に絶命した。

その日の酉とりの下刻げこくに、上邸かみやしきから見分けんぶんに来た。徒目附こびと、小人目附等に、手附てつけが附いて来たのである。見分の役人は三右衛門の女房、倅宇平、娘りよの口書くちがきを取った。

役人の復命に依よって、酒井家から沙汰があつた。三右衛門が重手おもてを負いながら、癖者を中の口まで追つて出たのは、「平生へいぜいの心得こころえかたよろしき方宜つぎに附、格式相当の葬儀可とりおこなふべし取行きぎす」と云うのである。三右衛門の創きずを受けた現場にあつた、

癖者の刀は、役人の手で元の持主五瀬某に見せられた。

二十八日に三右衛門の遺骸いがいは、山本家の菩提所ぼだいしよ浅草堂前の遍立寺へんりゆうじに葬とむらいられた。葬とむらいを出す前に、神戸方で三右

衛門が遭難当時とうじに持っていた物の始末をした時、大小も当然宇平が持って帰る筈であったが、娘りよは切に請うて脇差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾すると、泣き腫はらしていた、りよの目が、刹那せつなの間喜よろこびにかがやいた。

侍が親を殺害せつがいせられた場合には、敵討かたきうちをしなくては

ならない。ましてや三右衛門が遺族に取っては、その敵討が故人の遺言になつてゐる。そこで親族打ち寄つて、度々評議を凝こらした末、翌天保五年きのえうま甲午の歳の正月中旬に、表向敵討の願をした。

評議の席で一番熱心に復讐ふくしゅうがしたいと言ひ続けて、成功を急いで気を苛いらつたのは宇平であつた。色の蒼あおい、瘡やせた、骨細の若者ではあるが、病身ではない。姉のりよは始終黙つて人の話を聞いていたが、願書に自分の名を書き入れて貰うことだけは、きつと居直つて要求した。りよは十人並の容貌ようぼうで、筋肉の引き締まつた小女こおんなであ



る。未亡人は頭痛持でこんな席へは稀まれにしか出て来ぬが、出て来ると、若もし返かえりうち討あなどに逢あいはすまいかと云う心配ばかりして、果はてはどうしてこんな災難に遇ったことかと繰り返してくどくのであった。日が窪から来る原田夫婦や、未亡人の実弟桜井須磨右衛門すまえもんは、いつもそれを慰めようとして骨を折った。

然るにここに親戚一同がひどく頼みに思っている男が一人いる。この男は本国姫路にいたので、こう云う席には列くやみすることが出来なかつたが、訃音ふいんに接するや否や、弔慰くやみの状をよこして、敵討にはきつと助太刀をすると誓

ったのである。姫路ではこの男は家老本多意気揚いきぎりに仕えている。名は山本九郎右衛門と云って当年四十五歳になる。亡くなつた三右衛門がためには、九つ違の実弟である。

九郎右衛門は兄の訃音を得た時、すぐに主人意気揚に願書を出した。甥おい、女姪めいが敵討をするから、自分は留守を伴健蔵に委まかせて置いて、助太刀に出たいと云うのである。主人本多意気揚は徳川家康が酒井家に附けた意気揚の子孫で、武士道に心こころ入いれの深い人なので、すぐに九郎右衛門の願を聞き届けた。江戸ではまだ敵討の願を出し

たばかりで、上かみからそんな沙汰もないうちに、九郎右衛門は意気揚こしらえつきから拵ひとこしの刀一腰と、手当金二十両とを貰って、姫路を立った。それが正月二十三日の事である。

二月五日に九郎右衛門は江戸蠣殻町の中邸にある山本宇平が宅に着いた。宇平を始はじめ、細川家から暇いとまを取って帰っていた姉のりよが喜よろこびは譬たとえようがない。沈着で口数をきかぬ、筋骨たくま逞たくましい叔父おじを見たばかりで、姉も弟も安堵あんどの思をしたのである。

「まだこつちではお許は出んかい」と、九郎右衛門は宇平に問うた。

「はい。まだなんの御沙汰もございませぬ。お役人方に伺いましたが、多分忌中だから御沙汰がないのだらうと申すことで」

九郎右衛門は眉間みけんに皺しわを寄せた。暫しばいくして、「大きい車は廻りが遅いのう」と云った。

それから九郎右衛門は、旅の支度が出来たかと問うた。いずれお許が出てからと、宇平が云った。叔父の眉間には又皺が寄った。しかし今度は長い間なんとも言わなかつた。外の話の色色した後で、叔父は思い出したように云った。「あの支度はのう、先へして置いてても好いぞよ」

六日には九郎右衛門が兄の墓参をした。七日には浜町の神戸方へ、兄が末期まつごに世話になった礼に往った。西北の風の強い日で、丁度九郎右衛門が神戸の家にいるうちに、神田から火事が始まった。歴史に残っている午年うまどしの大火である。未ひつじの刻さくに佐久間町二丁目の琴三味線師の家から出火して、日本橋方面へ焼けひろがり、翌朝卯の刻まで焼けた。「八つ時分三味線屋からことを出し火の手がちりてとんだ大火事」と云う落首があった。浜町も蠣殻町も風下かざしたで、火の手は三つに分かれて焼けて来るのを見て、神戸の内は人出も多いからと云って、九郎右衛

門は蠣殻町へ飛んで帰った。

山本の内では九郎右衛門が指図をして、荷物は残らず出させたが、申さるの下刻には中邸一面が火になって、山本も焼けた。

りよは火事が始まるとすぐ、旧主人の細川家の邸をさして駆けて行ったが、もう豊島町は火になっていた。「あぶないあぶない」「姉さん火の中へ逃げちゃあいけねえ」などと云うものがある。とうとう避難者や弥や次じう馬ま共の間まに挟はさまれて、身動みうごぎもならぬようになる。頭の上へは火の子がばらばら落ちて来る。りよは涙ぐんで亀井町の手前

から引き返してしまった。内へはもう叔父が浜町から帰って、荷物を片付けていた。

浜町も矢の倉に近い方は大部分焼けたが、幸さいわいに酒井家の添邸は焼け残った。神戸家へ重かさねがさね々世話になるのは気の毒だと云うので、宇平一家はやはり遠い親戚に当る、添邸の山本平作方へ、八日の辰たつの刻過に避難した。

三右衛門が遺族は山本平作方の部屋を借りて、夢の中で夢を見るような心持になって、ぼんやりしている。未亡人は頭痛が起って寝たきりである。宇平は腕組をして

何やら考え込む。只りよ一人平作の家族に気兼ねきがねをしながら、甲斐々々かいがいしく立ち働いていたが、午頃ひるごろになつて細川の奥方の立退所たちのかきじよが知れたので、すぐに見舞に往つた。

晩にりよが帰ると九郎右衛門が云つた。「おい。もう当分我我は家なんぞはいらんが、若殿が旅に出て風を引かぬように、支度だけはして遣やらんではならんぞ」叔父は宇平を若殿々々と呼んで擲から揄かつているのである。

「はい」と云つたりよは、その晩から宇平の衣類に手を着けた。

九日にはりよが旅支度にいる物を買ひに出た。九郎右



衛門が書附にして渡したのである。きようは風が南に変わって、珍らしく暖いと思つていると、西とりの上刻に又檜物町ひものちようから出火した。おとついで焼けた町家まちやが、又この火事で焼けた。

十日には又寒い西北の風が強くと吹いていると、正午に大名小路だいみようこうじの松平まつだいら伯耆守宗発ほうきのかみむねあきらの上邸から出火して 京橋方面から芝口へ掛けて焼けた。

続いて十一日にも十二日にも火事がある。物価きようきようの高いのに、災難が引き続いてあるので、江戸中人心恟々きようきようとしている。山本方で商人に注文した、少しばかりの品物

にも、思い掛けぬ手違てちがえが出来て、りよが幾ら氣を揉もんで  
も、支度がなかなかはかどらない。

或る日九郎右衛門は烟草たばこを飲みながら、りよの裁縫す  
るのを見ていたが、不審らしい顔をして、烟管きせるを下に置  
いた。「なんだい。そんなちっぽけな物を拵こしらえたって、  
しようがないじゃないか。若殿はのっほでお出いでになるか  
らなあ」

りよは顔を赤くした。「あの、これはわたくしので」  
縫きっているのは女の脚絆きやはんこうがけ甲掛がけである。

「なんだと」叔父は目を大きく漣みはった。「お前も武者修

業に出るのかい」

「はい」と云ったが、りよは縫物の手を停とめない。

「ふん」と云って、叔父は良久ややひさしく女姪めいの顔を見てい

た。そしてこう云った。「そいつは駄目だ。お前のよう

な可哀らしい女の子を連れて、どこまで往くか分からん

旅が出来るものか。敵かたきにはどこで出逢うか、何年立っ

て出逢うか、まるで当あてがないのだ。己おれと宇平とは只それ

を捜しに行くのだ。見附かってからお前に知らせれば好い

いじゃないか」

「仰おっしやる通とおり、どこでお逢になるか知れませぬのに、き

つと江戸へお知らせになることが出来ましようか。それに江戸から参るのを、きつとお待になることが出来ましようか「罪のないような、狡猾こうかつらしいような、くりくりした目で、微笑を帯びて、叔父の顔をじつと見た。

叔父は少からず狼狽ろうばいした。「なる程。それは時と場合とに依る事で、わしもきつとは云い兼ねる。出来る事なら、どうにでもしてお前をその場へ呼んで遣るのだ。

万一間に合わぬ事があつたら、それはお前が女に生れた不肖ふしょうだと、諦あきらめてくれるより外ない」

「それ御覧遊ばせ。わたくしはどうしてもその万一の事

のないようにいたしとうございます。女は連れて行かれぬと仰やるなら、わたくしは尼になって参ります」

「まあ、そう云うな。尼も女じゃからのう」

りよは涙を縫物の上に落して、黙っている。叔父は一面詞ことばを尽して慰めたが、一面女は連れて行かぬと、きっぱり言い渡した。りよは涙を拭ふいて、縫いさした脚絆そばをそつと側そばにあつた風呂敷包ふろしきづつみの中にしまった。

酒井忠実は月番老中大久保加賀守忠真かがのかみただぎねと三奉行とに届済とどけずみの上で、二月二十六日附もつを以て、宇平、りよ、九

郎右衛門の三人に宛てた、大目附連署の証文を渡して、敵討を許した。「早々本意を達し可立歸、若又敵人死候しにさふらはば、慥たしかなる証拠を以可申立もつてまをしたつべし」と云う沙汰である。三人には手当が出る。留守へは扶持ふちが下がる。りよはお許は出ても、敵を捜しには旅立たぬことになって見れば、これで未亡人とりよとの、江戸での居所いどころさえ極めて置けば、九郎右衛門、宇平の二人は出立することが出来るのである。

りよは小笠原邸の原田夫婦が一先引き取るひとまずことになった。病身な未亡人は願濟ねがいずみの上で、里方桜井須磨右衛門

の家で保養することになった。

さていよいよ九郎右衛門、宇平の二人が門出かどでをしようとしたが、二人共敵の顔を識らない。人相書だけをたよりにするのは、いかにも心細いので、口入宿の富士屋や、請宿うけやどの若狭屋へ往って、色々問い質ただしたが、これと云う事実も聞き出されない。それに容貌が分からぬばかりでなく、生国も紀州だとは云っているが、確しかとしたことは分からぬらしい。只酒井家に奉公する前には、上州高崎にいたことがあると云うだけである。

その時、山本平作方へ突然尋ねて来た男がある。この

男は近江国浅井郡の産で、少い時に江戸に出て、諸家に仲間奉公ちゆうげんをしているうちに、丁度亀蔵と一しよに酒井家の表小使をして、三右衛門には世話になつたこともあるので、若しお役に立つようなら、幸さいわい今は酒井家から暇いとまを取っているから、敵の見識人みしりにんとして附いて行つても好いと云うのである。名は文吉と云つて、四十二歳になる。体は丈夫で、渡者わたりものの仲間には珍らしい、実直なものだと云うことが、一目見て分かつた。

九郎右衛門が会つて話をして見て、すぐに宇平の家来に召し抱かかえることにした。



九郎右衛門、宇平、文吉の三人は二十九日に菩提所遍立寺から出立することに極めて、前日に浜町の山本平作方を引き払って、寺へ往った。そこへは病気のまだ好くならぬ未亡人の外、りよを始、親戚一同が集まって来て、先ず墓参をして、それから離別の盃さかずきを酌くみ交かわした。住持はその席へ蕎麦そばを出して、「これは手討ぎりのらん切ぎりでございます」と、茶番めいた口上を言った。親戚は笑い興じて、只一人打ち萎しおれているりよを促し立てて帰った。

寺にひとよ一夜寝て、二十九日の朝三人は旅に立った。文吉

は荷物を負つて一步跡を附いて行く。亀蔵が奉公前にいたと云うのをたよりにして、最初上野こうずけのくに国高崎をさして往くのである。

九郎右衛門も宇平も文吉も、高崎をさして往くのに、亀蔵が高崎にいそうだと云う気にはなっていない。どこをさして往こうと云う見当が附かぬので、先ず高崎へでも往つて見ようと思うに過ぎない。亀蔵と云う、無頼漢とも云えば云われる、住所不定の男のありかを、日本国中で捜そうとするのは、米倉の中の米粒一つを捜すようなものである。どの俵に手を着けて好いか分からない。

然しそれ程の覚束おぼつかない事が、一方から見れば、是非共しと為遂げなくてはならぬ事である。そこで一行は先ず高崎と云う俵をほどいて見ることにした。

高崎では踪跡そうせきが知れぬので、前橋へ出た。ここには

えのきまち

せいじゆんじ

榎町の政淳寺に山本家の先祖の墓がある。九郎右衛門

等はそれに参つて成功を祈つた。そこから藤岡に出て、

五六日いた。そこから武蔵国むさしのくにの境を越して、兎玉村に三

日いた。三峯山みつみねさんに登つては、三峯権現ごんげんに祈願を籠こめた。

八王子を経て、甲斐国かいのくにに入つて、郡内、甲府を二日に廻

つて、身延山みのぶさんへ参詣さんけいした。信濃国しなのくにでは、上諏訪かみすわから和田

峠を越えて、上田の善光寺に参った。えちごのくに越後国では、高田を三日、今町を二日、かしわざき柏崎、長岡を一日、三条、新潟を四日で廻った。そこから加賀街道に転じて、えっちゅうのくに越中国に入つて、富山に三日いた。この辺は凶年の影響を蒙こうむることがはなはだ甚しくて、一行は麦に芋大根を切り交ぜた飯を食つて、農家の土間にむしろ筵を敷いて寝た。ひだのくに飛騨国では高山に二日、みののくに美濃国では金山に一日いて、きなやま木曾路を太田に出た。おわりのくに尾張国では、犬山に一日、名古屋に四日いて、東海道を宮に出て、佐屋を経ていせのくに伊勢国に入り、桑名、四日市、津を廻り、松坂に三日いた。

一行が二日以上泊るのは、稀に一日の草臥くたびれやす休やすをする  
 こともあるが、大抵何か手掛りがありそうに思われるの  
 で、特別搜索をするのである。松坂では殿町に目代岩橋もくだい  
 某と云うものがいて、九郎右衛門等の言うことを親切に  
 聞き取って、綿密な調べをしてくれた。その調べ上げた  
 事実を言って聞せられた時は、一行は暗ともしび中に燈火を認め  
 たような気がしたのである。

松坂に深野屋佐兵衛と云う大商人おおしやうにんがある。そこへは  
 紀伊国熊野浦長島外町の漁師定右衛門さだえもんと云うものが毎日

魚うおを送ってよこす。その縁で佐兵衛は定右衛門一家けと心安くなっている。然るに定右衛門の長男亀蔵は若い時江戸へ出て、音信いんしん不通になったので、二男定助一人をたよりにしている。その亀蔵が今年正月二十一日に、襪はき褌ろを身に纏まとって深野屋へ尋ねて来た。佐兵衛は「お前のような不孝者を、親父様おやじさまに知らせずに留めて置く事は出来ぬ」と云った。亀蔵はすぐすぐ深野屋の店を立ち去ったが、それを見たものが、「あれは紀州の亀蔵と云う男で、なんでも江戸で悪い事をして、逃げて来たのだらう」と評判した。

後に深野屋へ聞えた所に依ると、亀蔵は正月二十四日に、熊野仁郷村にんごうむらにいるははかたの小父林助の家に来て、置いてくれと頼んだが、林助は貧乏していて、人を置くことが出来ぬと云って、勧めて父定右衛門が許もとへ遣やった。知人にたよろうとし、それが愜かなわぬ段になって、始めて親戚をおとずれ、親戚にことわられて、亀蔵はようよう親許へ帰る気になつたらしい。定右衛門の家には二十八日に歸つた。

二月中旬に亀蔵は江戸で悪い事をして歸つたのだらうと云う噂うわさが、松坂から定右衛門の方へ聞えた。定右衛

門が何をしたかと問うた時、亀蔵は目上の人に創を負わせたと言った。そこで定右衛門と林助とで、亀蔵を坊主にして、高野山こうやさんに登らせることにした。二人が剃髪ていはつした亀蔵を三浦坂まで送って別れたのが二月十九日の事である。亀蔵はその時茶の弁慶べんけい縞の木綿綿入を着て、木綿帯を締め、藍あいの股引ももひきを穿はいて、脚絆を当てていた。懐中には一両持っていた。

亀蔵は二十二日に高野領清水村の又兵衛と云うものの家に泊って、翌二十三日も雨が降ったので滞留した。そして二十四日に高野山に登った。山で逢ったものもある。



二十六日の夕方には、下山して橋本にいたのを人が見た。それからは行方不明になっている。多分四国へでも渡ったかと云うことである。

松坂の目代にこの顛末てんまつを聞いた時、この坊主になった定右衛門の倅亀蔵が敵だと云うことに疑を挾はさむものは、主従三人の中うちに一人もなかった。宇平はすぐに四国へ尋ねに往こうと云った。しかし九郎右衛門がそれを止めて、四国へ渡ったかかも知れぬと云うのは、根拠のない推量である、四国へもいずれ往くとして、先ず手近な土地から

捜すが好いと云った。

一行は松坂を立って、武運を祈るために参宮した。それから関を経て、東海道を摂津国大阪に出で、ここに二十三日を費した。その間に松坂からたより便があつて、紀州の定右衛門が倅の行末を心配して、きやみ氣病で亡くなつたと云う事を聞いた。それからにしのみや西宮、ひょうご兵庫を経て、はりまのくに播磨国に入り、あかし明石から本国姫路に出で、うおまち魚町の旅宿に三日いた。九郎右衛門は倅の家があつても、本意を遂げるまでは立ち寄らぬのである。それからびぜんのくに備前国に入り、岡山を経て、しもやま下山から六月十六日の夜舟に乗って、いよいよ四

国へ渡った。松坂以来九郎右衛門の搜索方ほうしん鍼しんに對して、稍やや不満らしい気色を見せながら、つまりは意志の堅固な、機嫌うきしずみに浮沈うきしずみのない叔父に威圧せられて、附いて歩いてきた宇平が、この時急に活気を生じて、船中で夜の更ふけるまで話し続けた。

十六日の朝舟は讚岐国丸龜さぬきのくにまるがめに着いた。文吉に松尾を尋ねさせて置いて、二人は象頭山ぞうずさんへ祈願たしよものに登った。すると参籠人さんろうにんが丸龜で一癖ありげな、他所たしよもの者の若い僧を見たとき、云う話をした。宇平はもう敵を見附けたような気になつて、亥いの刻に山を下った。丸龜に帰って、文吉を松尾か

ら呼んで僧を見させたが、それは別人であつた。

いよのくに

伊予国の銅山は諸国の悪者の集まる所だと聞いて、一

行は銅山を二日搜した。それから西条に二日、小春、今治

に二日いて、松山から道後の温泉に出た。ここへ来るま

でに、暑あつさを侵おかして旅行をした宇平は留飲りゅういん疝せん通つうに悩み、

文吉も下痢して、食事が進まぬので、湯町で五十日の間

保養した。大分体が好くなつたと云つて、中大洲なかおおすを二日

搜して、八幡浜やはたはまに出ると、病後を押し歩いた宇平が、

力抜けがして煩わづらつた。そこで五日間滞留して、ようよ

う九州行の舟に乗ることが出来た。四国の旅は空むなしく過

ぎたのである。

舟は豊後国佐賀関ぶんごのくにさがのせきに着いた。鶴崎つるさきを経て、肥後国ひごのくにに入り、阿蘇山あそさんの阿蘇神宮、熊本くまもとの清正公せいししょうこうへ祈願ひぜんに参つて、熊本と高橋とを三日ずつ搜して、舟で肥前国ひぜん島原に渡つた。そこに二日いて、長崎へ出た。長崎で三日目に、敵らしい僧を島原で見たと云う話を聞いて、引き返して又島原を五日尋ねた。それから熊本を更に三日、宇土を二日、八代やつしろを一日、南工宿なんくじゆくを二日尋ねて、再び舟で肥前国ひぜん温泉嶽おんせんだけの下の港へ渡つた。すると長崎から来た人の話

に、敵らしい僧の長崎にいることを聞いた。長崎上筑後町かみちくごまちの一向宗いっこうしゅうの寺に、勧善寺と云うのがある。そこへ二十歳前後の若い僧が来て、棒を指南していると云うのである。一行は又長崎行の舟に乗った。

長崎に着いたのは十一月八日の朝である。舟引地町ふなひきじまちの紙屋と云う家に泊って、町年寄まちどしより福田某たがねにんに尋人の事を頼んだ。ここで聞けば、勧善寺の客僧はいよいよ敵らしく思われる。それは紀州産うまれのもので、何か人目を憚はばかるわけがあると云って、門外不出で暮していると云うのである。親切な町年寄は、若し取り逃がしてはならぬと云つ

て、盜賊方二人にんを同行させることにした。町で劍術師範を  
をしている小川某と云うものも、町年寄の話聞いて、  
是非その場に立ち会って、場合に依っては助太刀がした  
いと申し込んだ。

九郎右衛門、宇平の二人は、大村家の侍で棒の修行を  
懇望こんもうするものだと云って、勸善寺みに弟子入の事を言い入  
れた。客僧は承引して、あすの巳みの刻に面会しようと云  
った。二人は喜び勇んで、文吉を連れて寺へ往く。小川  
と盜賊方の二人とは跡に続く。さて文吉に合図を教えて  
客僧に面会して見ると、似も寄らぬ人であった。ようよ

うその場を取り繕って寺を出たが、皆忌々いまいましがる中に、  
宇平は殊ことに落胆した。

一行は福田、小川等に礼を言つて長崎を立つて、大村  
に五日いて佐賀へ出た。この時九郎右衛門が足痛を起し  
て、杖つえを衝ついて歩くようになった。筑後国ちくごのくにでは久留米くろめを  
五日尋ねた。筑前国では先まず大宰府天満宮に参詣さんけいして祈  
願を籠め、博多はかた、福岡に二日いて、豊前国小倉こくらから舟に  
乗つて九州を離れた。

ながとのくに長門国下関に舟で渡つたのが十二月六日であつた。雪



は降つて来る。九郎右衛門の足痛は次第に重るばかりである。とうとう宇平と文吉とで勧めて、九郎右衛門を一旦いったん姫路へ帰すことにした。九郎右衛門は渋りながら下関から舟に乗つて、十二月十二日の朝播磨国室津むろつに着いた。そしてその日のうちに姫路の城下平ひらの町まちの稲田屋に這入はいった。本意を遂げるまでは、飽くまでも旅中の心得でいて、俵の宅には帰らぬのである。

宇平は九郎右衛門を送つて置いて、十二月十日に文吉を連れて下関を立った。それから周防国宮市すおうのくにに二日いて、室積むろづみを経て、岩国の錦帯橋へ出た。そこを三日搜して、

舟で安芸あきのくに国宮島へ渡った。広島に八日いて、備後びんごのくに国に入り、尾の道、鞆ともに十七日、福山に二日いた。それから備前国岡山を経て、九郎右衛門の見舞かたがた旁かたがた姫路に立ち寄った。

宇平、文吉が姫路の稲田屋で九郎右衛門と再会したのは、天保六年乙きのとひつじ未つみの歳正月二十日であった。丁度その時こうがん広岸こうがん（広峯ざん）山さんの神主かんぬし谷口某と云うものが、怪しい非人の事を知らせてくれたので、九郎右衛門が文吉を見せに遣った。非人は石見いわみ産うまれだと云っていた。人に怪まれるのは脇差を持っていたからであった。しかし敵ではなか

った。

九郎右衛門の足はまだなかなか直らぬので、宇平は二月二日に文吉を連れて姫路を立って、五日に大阪に着いた。宿は阿波座あわざおくひ町の摂津国屋つづくにやである。然るに九郎右衛門は二人を立たせてから間もなく、足が好くなつて、十四日には姫路を立って、明石から舟に乗って、大阪へ追いかけて往つた。

三人は摂津国屋に泊って、所々を尋ね廻るうちに、路銀が尽きそうになつた。そこで宿屋の主人の世話で、九

郎右衛門は按摩あんまになり、文吉は淡島あわしまの神主になった。按摩になったのは、柔術の心得があるから、按摩の出来ぬ筈はないと云うのであった。淡島の神主と云うのは、神社で神に仕えるものではない。胸に小さい宮を懸けて、それに紅もみで縫った括猿くくりざるなどを吊つり下げ、手に鈴を振つて歩く乞食こじきである。

その時九郎右衛門、宇平の二人は文吉に暇いとまを遣ろうとして、こう云った。これまでも我々は只お前と寝食を共にすると云うだけで、給料と云うものも遣らず、名のみ家来にしていたのに、お前は好く辛抱して勤めてくれ

た。しかしもう日本全国をあらかじめ遍歴して見たが、敵はなかなか見附からない。この按排あんばいでは我々が本意を遂げるのは、いつの事か分らない。事によつたらこのまま恨うらみを呑のんで道路にのたれ死をするかも知れない。お前はこれまで詞ことばで述べられぬ程の親切を尽してくれたのだから、どうもこの上一しよにいてくれとは云い兼ねる。勿論敵もちろんの面体めんていを見識らぬ我々は、お前に別れては困るに違なないが、もはや是非に及ばない。只運を天に任せて、名告なり合う日を待つより外はない。お前は忠実この上もない人であるから、これから主取しゅとうどりをしたら、どんな立

身も出来よう。どうぞここで別れてくれと云うのであつた。

九郎右衛門は兼て宇平に相談して置いて、文吉を呼んでこの申渡もうしわたしをした。宇平は側そばで腕組をして聞いていたが、涙は頬を伝って流れていた。

黙って衝つつ伏ふして聞いていた文吉は、詞の切れるのを待って、頭を擡もたげた。漣みはった目は異様に赫かがやいている。

そして一声「檀那だんな、それは違います」と叫んだ。心は激して詞はしどろであつたが、文吉は大凡おおよそこんなことを言つた。この度たびの奉公はあたりまえ当前の奉公ではない。敵討の供

に立つからは、命はないものである。お二人が首尾好く本意を遂げられれば好し、万一敵に多勢の悪者でも荷担して、かえりうち返討にでも逢われれば、一しよに討たれるか、その場を逃れて、二重の仇を討つかの二つより外ない。足腰の立つ間は、よしやお暇が出ても、影の形に添うように離れぬと云うのであった。

さすがの九郎右衛門も詞の返しようがなかつた。宇平はよみが蘇おもいった思をした。

それから三人が摂津国屋を出て、木賃宿きちんやどに起臥おきふしすることになった。もうどこをさして往って見ようと云う所

もないので、只已やむに勝まさる位の考で、神仏の加護を念じながら、日ごとに市中を徘徊はいかいしていた。

そのうち大阪に咳逆がいぎやくが流行して、木賃宿も咳せきをする人だらけになった。三月の初に宇平と文吉とが感染して、熱を出して寝た。九郎右衛門は自分の貰った錢で、三人が一口ずつでも粥かゆを啜すするようになしていた。四月の初に二人が本復すると、こん度は九郎右衛門が寝た。体は巖がんじょう置でも、年を取っているので、容体ようたいが二人より悪い。人の好い医者いしやを頼んで見て貰うと、傷寒しょうかんだと云った。それは熱が高いので、うわごと 譫語うわごとに「こら待て」だの「逃がすもの



か」だのと叫んだからである。

木賃宿の主人が迷惑がるのを、文吉が宥めなだ賺すかして、病人を介抱しているうちに、病附やみつぎの急劇であつたわりに、九郎右衛門の強い体は少い日数ひかずで病気に打ち勝つた。

九郎右衛門の恢復かいふくしたのを、文吉は喜んだが、ここに今一つの心配が出来た。それは不断から機嫌きげんの変わり易やすい宇平が、病後に際立きわつて精神の変調を呈して来たことである。

宇平は常はおとなしい性たちである。それにどこか世馴れ

ぬぼんやりした所があるので、九郎右衛門は若殿と綽号あだなを付けていた。しかしこの若者は柔い草葉の風に靡なびくように、何事にも強く感動する。そんな時には常蒼つねあおい顔にくれない紅あかが潮ちようして来て、別人のように能弁になる。それが過ぎると反動が来て、沈鬱ちんうつになって頭を低たれ手を拱こまねいて黙っている。

宇平がこの性質には、叔父も文吉も慣れていたが、今の様子はそれとも変って来ているのである。朝夕平穩ちようせきな時がなくなつて、始終興奮いらいらしている。苛々いらいらしたような起居振舞たちいふるまいをする。それにいつものような発揚の状態にな

っ、饒舌おしやべりをすることは絶えて無い。寧むしろ沈黙勝だと云  
 っても好い。只興奮しているために、瑣細ささいな事にも腹を  
 立てる。又何事もないと、わざわざ人を挑いどんで詞尻ことばじりを  
 取って、怒いかりの動機を作る。さて怒が生じたところで、  
 それをあらわに発動させずに、口小言を言すって拗ねてい  
 る。  
 こう云う状態が二三日続いた時、文吉は九郎右衛門に  
 言った。「若檀那わかだんなの御様子はどうも変じやございません  
 か」文吉は宇平の事を、いつか若檀那と云うことになっ  
 ていた。

九郎右衛門は氣にも掛けぬらしく笑って云った。「若殿か。あの御機嫌の悪いのは、旨うまい物でも食わせると直るのだ」

九郎右衛門のこう云ったのも無理はない。三人は日ごとに顔を見合っていて気が附かぬが、困窮びようと病痾あと羈旅きりよとの三つの苦艱くげんを嘗なめ尽して、どれもこれも江戸を立つた日のおもかげ 倂おもかげ はなくなっているのである。

文吉がこの話をした翌日の朝であつた。相宿あいやどのものがそれぞれ稼かせぎに出た跡で、宇平は九郎右衛門の前に膝ひざを進めて、何か言い出しそうにして又黙ってしまった。

「どうしたのだい」と叔父が云った。

「実は少し考えた事があるので」

「なんでも好いから、そう云え」

「おじさん。あなたはいつ敵に逢えると思っ  
ていますか」

「それはお前にも分かるまいが、己おれにも分からんかう」

「そうでしょう。蜘蛛くもは網いを張って虫の掛かかるのを待っ  
ています。あれはどの虫でも好いのだから、平気で待っ  
ているのです。若し一匹の極きまった虫を取ろうとするの  
だと、蜘蛛の網は役に立ちますまい。わたしはこうして

僥倖きようじゆんを当あにしていつまでも待つのが厭いやになりました」

「随分己もお前も方々歩いて見たじゃないか」

「ええ。それは歩くには歩きましたが」と云い掛けて、  
宇平は黙った。

「はてな。歩くには歩いたが、何が悪かったと云うのか。構わんから言え」

宇平はやはり黙って、叔父の顔をじっと見ていたが、暫くして云った。「おじさん。わたし共は随分歩くには歩きました。しかし歩いたってこれは見附からないのが  
あたりまえ当前あたりまえかも知れません。じっとして網を張っていたって、

来て掛かりっこはありませんが、歩いていたらって、打ぶつ附つからないかも知れません。それを先へ先へと考えてみますと、どうも妙です。わたしは変な心持がしてなりません」宇平は又膝を進めた。「おじさん。あなたはどうしてそんな平気な様子をしていられるのです」

宇平のこの詞を、叔父は非常な注意の集中を以もつて聞いていた。「そうか。そう思うのか。よく聴きけよ。それは武運が拙つたなくて、神にも仏にも見放されたら、お前の云う通だろう。人間はそうしたものではない。腰こしが起たてば歩いて捜す。病気になれば寝ていて待つ。神しんぶつ仏ぶつの加護が

あれば敵にはいつか逢われる。歩いて行き合うかも知れぬが、寝ている所へ来るかも知れぬ」

宇平の口角には微かすかな、嘲あざけるような微笑が閃ひらめいた。

「おじさん。あなたは神や仏が本当に助けてくれるものだと思っっていますか」

九郎右衛門は物に動ぜぬ男なのに、これを聞いた時には一種の気味悪さを感じた。「うん。それは分からん。分からんのが神かみほとけ仏だ」

宇平の態度は不思議に恬然てんぜんとしていて、いつもの興奮の状態とは違っている。「そうでしょう。神かみほとけ仏は分か



らぬものです。実はわたしはもう今までしたような事を罷<sup>や</sup>めて、わたしの勝手にしようかと思っっています」

九郎右衛門の目は大きく開いて、眉が高く拳<sup>こぶし</sup>がったが、見る見る蒼ざめた顔に血が升<sup>のぼ</sup>って、拳<sup>こぶし</sup>が固く握られた。

「ふん。そんなら敵討<sup>やめ</sup>は罷<sup>やめ</sup>にするのか」

宇平は軽く微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。おこったことのない叔父をおこらせたのに満足したらしい。「そうじやありません。亀蔵は憎い奴ですから、若し出合ったら、ひどい目に逢わせて遣ります。だが捜すのも待つのも駄目ですから、出合うまではあいつの事なんか考えずにいます。わたしは

晴がましい敵討をしようとは思いませんから、助太刀も  
 いりません。敵が知れば知れる時知れるのですから、  
 見識みしりにん人もいりません。文吉はこれからあなたの家来にし  
 てお使下さいまし。わたしは近い内にお暇をいたす積で  
 す」

九郎右衛門が怒は発するや否やたちまち解けて、宇平の  
 この詞ことばを聞いている間に、いつもの優やさしいおじさんに  
 なっていた。只何事をも強しいて笑じょうだん談に取りなす癖のお  
 じが、珍めづらしく生真面目きまじめになっただけである。

宇平が席を起って、木賃宿の縁側を降りる時、叔父は

「おい、待て」と声を掛けたが、宇平の姿はもう見えなかった。しかし宇平がこれきりいなくなるうとは、叔父は思わなかった。

夕方に文吉が帰ったので、九郎右衛門は近所へ往って宇平を尋ねて来いと云った。宇平は折々町の若い者の象棋しょうぎをさしている所などへ往った。最初は敵の手掛りを聞き出そうとして、雑談に耳を傾けていたのだが、後には只何となしにそこで話していたのである。文吉はそう云う家を尋ねた。しかしどこにもいなかった。その晩

には遅くなるまで九郎右衛門が起きていて、宇平の帰るのを待ったが、とうとう帰らなかつた。

文吉は宇平を尋ねて歩いた序ついでに、ふと玉造たまつくり豊空ほうくう稻荷いなりの靈驗れいげんの話聞いた。どこの誰たれの親の病気が直つたとか、どこの誰は迷子の居所を知らせて貰つたとか、若い者共が評判し合つていたのである。文吉は九郎右衛門にことわつて、翌日行水して身を潔きよめて、玉造をさして出て行つた。敵のありかと宇平の行方とを伺つて見ようと思つたのである。

稻荷いなりの社やしらの前に来て見れば、大勢の人が出入でいりしてい

る。数えられぬ程多く立ててある、赤い鳥居が重なり合  
っていて、群集はその赤い洞ほらの中で蠢うごめいているのであ  
る。外廻りには茶店が出来ている。汁粉屋がある。甘酒  
屋がある。赤い洞の両側には見せ物小屋やらおもちゃ店みせ  
やらが出来ている。洞を潜くぐって社に這入ると、神主がお  
初穂と云って金を受け取って、番号札をわたす。伺を立  
てる人をその番号順に呼び入れるのである。

文吉は持っていただけの錢を皆お初穂に上げた。しか  
し順番がなかなか来ぬので、とうとう日の暮れるまで待  
った。何も食わずに、腹が耗へったとも思わずにいたので

ある。暮六つが鳴ると、神主が出て「残りの番号の方は明朝お出なさい」と云った。

次の日には未明に文吉が社へ往った。番号順は文吉より前なのに、まだ来ておらぬ人があったので、文吉は思ったより早く呼び出された。文吉が沙すなに額うづを埋めて拝みながら待っていると、これも思ったより早く、神主が出て御託宣を取り次いだ。「初の尋人たずねにんは春頃から東国の繁華な土地にいる。後の尋人の事は御託宣が無い」と云った。

文吉は玉造から急いで帰って、御託宣を九郎右衛門に

話した。

九郎右衛門はそれを聞いて云った。「そうか。東国の繁華な土地と云えば江戸だが、いかに亀蔵が横着でも、うかと江戸には戻ってしまい。成程我々が敵討に余所よそへ出たと云うことは、噂に聞いたかも知れぬが、それにしても外の親戚も気を付けているのだから、どうも江戸に戻っていきそうにない。お前は神主に一杯食わされたのじやないか。後の尋人が知れぬと云うのも、お初穂がもう一度貰いたいのかも知れん」

文吉はひどく勿体もったいながって、九郎右衛門の詞を遮さへぎる

ようにして、どうぞそう云わずに御託宣を信ずる気になつて貰いたいと頼んだ。

九郎右衛門は云った。「いや。己は稻荷様を疑いはせぬ。只どうも江戸ではなさそうに思うのだ」

こう云っている所へ、木賃宿の亭主が来た。今家主のいえぬし

所へ呼ばれて江戸から来た手紙を貰ったら、山本様へのお手紙であつたと云つて、一封の書状を出した。九郎右

衛門が手に受け取つて、「山本宇平殿、おなじく同 九郎右衛門

殿、桜井須磨右衛門、平安」と読んだ時、木賃宿でも主従の礼儀を守る文吉ではあるが、兼て聞き知っていた後こう



室しつの里からの手紙は、なんの用事かと気が急せいて、九郎右衛門が披ひらく手紙の上に、乗り出すようにせずにはいられなかつた。

敵討の一行が立った跡で、故人三右衛門の未亡人は、里方桜井須磨右衛門の家で持病の直るのを待った。暫くすると難儀に遭あつてから時が立ったのと、四方あたりが静になつたのとのために、頭痛が余程軽くなつた。実弟須磨右衛門は親切にはしてくれるが、世話せわにばかりなつてもいいないので、未亡人は余り忙せわしくなく奉公口をと云つて

捜して、とうとう小川町俎橋まないたばしぎわ際の高家衆大沢右京こうけしゅう  
たいふもとあき大夫基昭が奥に使われることになった。

宇平の姉りよは叔母婿原田方に引き取られてから、墓  
 参の時などには、櫛しきみを売る媪うばの世間話にも耳を傾けて、  
 敵のありかを聞き出そうとしていたが、いつか忌いみも明け  
 た。そこで所々しよしよに一二箇月ずつ奉公していたら、自然手  
 掛りを得るたつきにもなろうと思ひ立って、最初は本所  
 の或る家に住み込んだ。これは遠い親戚に当るので、奉  
 公人やら客分やら分からぬ待遇を受けて、万事の手伝を  
 したのである。次に赤坂の堀と云う家の奥に、大小母おおおが

勤めていたので、そこへ手伝に往つた。次に麻布あざぶの或る家よりあいしゆうに奉公した。次に本郷弓町の寄合衆たてわき本多帯刀の家来に、遠い親戚があるので、そこへ手伝に往つた。こんな風かめに奉公先を取り替えて、天保六年の春からは御茶の水のしんの寄合衆酒井龜之進ただみちの奥ただみちに勤めていた。この酒井の妻は浅草の酒井石見守忠方ただみちの娘である。

未亡人もりよも敵のありかを聞き出そうと思つて、中にもりよは昼夜それに心を砕いていたが、どうしても手掛りがない。九郎右衛門や宇平からは便たよりが絶々たえだえになるのに、江戸でも何一つでかした事がない。女子おなご

達の心細さは言おう様がなかつた。

月日が立って、天保六年の五月の初になつた。或る日未亡人の里方の桜井須磨右衛門が浅草の観音に参詣して、茶店に腰を掛けていると、今まで歇やんでいた雨が又一しきり降って来た。その時茶店の軒へ駆け込んで雨を避ける二人連づれの遊あそび人体にんていの男がある。それが小降になるのを待ちながら、軒に立ってこんな話をした。

一人が云つた。「お前に話そうと思つて忘れていたが、ゆうべの事だつた。丁度今のように神田で雨に降り出されて、酒問屋さかどいの戸の締やっている外でしやがんでいると、

そこへ駆け込んだ奴やつがある。見れば、あの酒井様にいた  
 亀じゃあねえか。己はびっくりしたよ。好くずうずうし  
 く帰って来やがったと思ひながら、おい、亀と声を掛け  
 たのだ。すると、えと云って振り向いたが、人ひと違ちがえをし  
 なさんな、おいらあ虎とらと云うもんだと云つといて、まだ  
 雨がどしどし降っているのに、駆け出して行つてしまや  
 がつた」

今一人が云つた。「じゃあ又帰つていやがるのだ。太ふて  
 え奴やつだなあ」

須磨右衛門は二人に声を掛けて、その亀と云う男は何

者だと問うた。二人は侍に糺ただされるのをひどく当惑がる様子であつたが、おとどしの暮に大手の酒井様のお邸で悪い事をして逃げた仲間の亀蔵ちゅうげんの事だと云つた。そして最後に「なに、ちよいと見たのですから、全く人違で、本当に虎と云うものだったかも知れません」と詞を濁した。只見掛けたと云うだけのこの二人を取り押さえても、別に役に立ちそうではなく、又荒立てて亀蔵に江戸を逃げられてはならぬと思つて、須磨右衛門は穩便に二人を立ち去らせた。

大阪で九郎右衛門が受け取ったのは、桜井から亀蔵の江戸にいることを知らせて遣った手紙である。

文吉はすぐに玉造へお礼参まいりに往った。九郎右衛門は文吉の帰るのを待って、手分をして大阪の出口々々を廻って見た。宇平の行方を街道の駕籠かごの立場たてば、港の船問屋ふなどいやに就いて尋ねたのである。しかしそれは皆徒労であつた。

九郎右衛門は是非なく甥おいの事を思い棄てて、江戸へ立つ支度をした。路銀は使い果しても、用心金ようじんきんと衣類腰ひとえものの物には手は着けない。九郎右衛門は花色木綿の単物ひとえものに茶小倉の帯を締め、紺麻こんあさがすり緋あざの野羽織を着て、両刀を

手挟たばさんだ。持物は鳶色とびいろごろふくの懐中物、鼠木綿ねずみもめんの鼻紙袋、十手早繩はやなわである。文吉も取って置いた花色の単物おなんどに御納戸小倉の帯を締めて、十手早繩を懐中した。

木賃宿の主人には礼金を遣り、摂津国屋へは挨拶あいさつに立ち寄って、九郎右衛門主従は六月二十八日の夜船で、伏見から津へ渡った。三十日に大暴風おおあらしで阪の下に半日留められた外は、道中なんの障さわりもなく、二人は七月十一日の夜品川に着いた。

十二日寅とらの刻に、二人は品川の宿を出て、浅草の遍へん立寺りゆうじに往って、草鞋わらじのまままで三右衛門の墓に参った。



それから住持に面会して、一夜旅の疲を休めた。

翌十三日は盂蘭盆会で、親戚のものが墓参に来る日である。九郎右衛門は住持に、自分達の来たのを知らせてくれるなど口止をして、自分と文吉とは庫裡に隠れていた。住持はなぜかと問うたが、九郎右衛門は只「謀は密なるをとうとぶと申しますからな」と云ったきり、外の話にまぎらした。墓参に来たのは原田、桜井の女房達で、厳しい武家奉公をしている未亡人やりよは来なかった。

戌の下刻になった時、九郎右衛門は文吉に言った。「さ

あ、これから捜しに出るのだ。見附けるまでは足を摺粉木すりこぎにして歩くぞ」

遍立寺を旅支度のままで出た二人は、先ず浅草の観音をさして往った。雷門近くなった時、九郎右衛門が文吉に言った。「どうも坊主にはなっておらぬらしいが、どんな風体ふうていでいても見逃がすなよ。だがどうせ立派なりな形はしていないのだ」

境内けいだいを廻って、観音を拜んで、見識人みしりにんを桜井に逢わせくらまえて貰った礼を言った。それから蔵前くらまえを両国へ出た。きよ

うは蒸暑いのに、花火があるので、涼すずみ旁かたがた見物に出た人が押し合っている。提ちようちん灯に火を附ける頃、二人は茶店で暫く休んで、汗が少し乾くと、又歩き出した。

川も見えず、船も見えない。玉や鍵かぎやと叫ぶ時、群集うなじが頃そを反らして、群集の上の花火を見る。

西とりの下刻と思われる頃であつた。文吉が背後うしろから九郎右衛門の袖を引いた。九郎右衛門は文吉の視線を辿たどつて、左手一步前を行く背の高い男を見附けた。古びた中形ちゆうがた木綿ひとえものの単物ひとえものに、古びた花色縞博多しまはかたの帯を締めている。

二人は黙って跡を附けた。月の明るい夜である。横山

町を曲る。塩町しおちようから大伝馬町おおでんまちように出る。本町を横切って、石町こくちよう河岸がしから龍閑橋りゆうかんばし、鎌倉河岸かまくらがしに掛る。次第に人通が薄らぐので、九郎右衛門は手拭を出して頬被ほおかぶりをして、わざとよろめきながら歩く。文吉はそれを扶たすける振ふりをして附ついて行く。

神田橋外もとごじ元護寺院いん二番原に來た時は丁度子ねの刻頃であった。往来はもう全く絶えている。九郎右衛門が文吉に目ぐわせをした。二つの体を一つの意志で働かすように二人は背後うしろから目ざす男に飛び着いて、黙って両腕をしつかり攫つかんだ。

「何をしやあがる」と叫んだ男は、振り放そうと身をもがいた。

無言の二人は釘拔くぎぬきで釘を挟んだように腕を攫さらんだまま、もがく男を道傍みちばたの立木の蔭へ、引き摩ずって往った。

九郎右衛門は強烈な火を節光板で遮ったような声で云った。「己はおとどしの暮お主ぬしに討たれた山本三右衛門の弟九郎右衛門だ。国所くにどころと名前を言つて、覚悟をせい」「そりやあ人違だ。おいらあ泉州せんしゅうまれ産で、虎蔵と云うものだ。そんな事をした覚おぼえはねえ」

文吉が顔を覗のぞき込んだ。「おい。亀。目の下の黒痣ほくろま

で知っている己がいる。そんなしらを切るな」

男は文吉の顔を見て、草葉が霜に萎れるように、がくりと首を低れた。た「ああ。文公か」

九郎右衛門はこれだけ聞いて、手早く懐中から早縄を出して、男を縛った。そして文吉に言った。「もうここは好いから、お茶ノ水の酒井亀之進様のお邸へ往つてくれ。口上はこうだ。手前は御当家的にお奥に勤めているりよの宿許やどもとから参りました。母親が霍乱かくらんで夜明よあけまで持つまいと申すことでござります。どうぞ格別の思召おほしめしでお暇を下さって、一目お逢わせ下さるようにと、そう云うの

だ。急げ」

「は」と云つて、文吉は錦町にしきちょうの方角へ駆け出した。

酒井亀之進の邸では、今宵奥こよいのひけが遅くて、りよはようよう部屋に帰つて、寝巻に着換えようとしている所であつた。そこへ老女の使が呼びに来た。

りよは着換えぬうちで好かつたと思ひながら、すぐに起つて上草履うわぞうりを穿はいて、廊下づたい伝に老女の部屋へ往つた。

老女は云つた。「お前の宿から使が来ているがね、母親が急病だと云うことだ。盆ではあり、御多用の所だが、

親の病気は格別だから、帰ってお出<sup>いで</sup>。親御に逢ったら、夜でもすぐにお邸へ戻るのだよ。あすになつてから、又改めてお暇を願つて遣るから」

「難有<sup>ありがと</sup>うございます」と、りよはお請<sup>うけ</sup>をして、老女の部屋をすべり出た。

りよはこのまま往つても好いと考えながら、使とは誰が来たのかと、奥の口へ覗きに出た。御用を勤める時の支度で、木綿中形の単物に黒縹<sup>くろしめす</sup>子の帯を締めていたのである。奥の口でりよは旅支度の文吉と顔を見合せた。そして親の病気が口実だと云うことを悟つた。



りよと一しよに奥を下がった傍輩ほうばいが二三人、物珍らしげに廊下に集まって、りよが宿の使に逢うのを見ようとしてしている。

「ちよいと忘物をいたしましたから」と、りよは独言ひやりのことのように云って、足を早めて部屋へ引き返した。

部屋の戸を内から締めたりよは、葛籠つづらの蓋ふたを開けた。

先ず取り出したのは着換の帷子かたびら一枚である。次に臂ひじをずつと底までさし入れて、短刀を一本取り出した。当番の夜父三右衛門が持っていた脇差である。りよは二品を手早く袱紗ふくさに包んで持って出た。

文吉は敵を掴まえた顛末を、途中でりよに話しながら、  
護持院原へ来た。

りよは九郎右衛門に挨拶して、着換をする余裕はない  
ので、短刀だけを包の中から出した。

九郎右衛門は敵に言った。「そこへ来たのが三右衛門  
の娘りよだ。三右衛門を殺した事と、自分の国所名前を  
そこで言え」

敵は顔を挙げてりよを見た。そして云った。「わたし  
もこれまでだ。本当の事を言います。なる程山本さんに創きず

を附けたのはわたしだが、殺しはしません。勝負事に負けて金に困ったものですから、どうかして金を取りたいと思つて、あんなへまな事をしました。わたしは泉州いくたごおり生田郡上野原村の吉兵衛きちべえと云うものの倅で、名は虎蔵と云います。酒井様へ小使に住み込む時、勝負事でしりあい識合になつていた紀州の亀蔵と云う奴の名を、口から出任せに言つたのです。この外に言うことはありません。どうぞ御存分になすつて下さい。」

「好く言つた」と九郎右衛門は答えた。そしてりよと文吉とに目ぐわせして虎蔵の縄を解いた。三人が三方から

じりじりと詰め寄った。

縄をほどかれて、しよんぼり立っていた虎蔵が、ひよいと物をねらう獣のように体を前屈まえかがみにしたかと思うと、突然りよに飛び掛かって、押し倒して逃げようとした。

その時りよは一步下がって、柄つかを握っていた短刀で、抜打に虎蔵を切った。右の肩尖かたさきから乳へ掛けて切り下げたのである。虎蔵はよろけた。りよは二太刀三太刀切った。虎蔵は倒れた。

「見事じゃ。とどめは己が刺す」九郎右衛門は乗り掛かって吭のどを刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎蔵の袖で拭いた。そしてりよにも脇差を拭かせた。二人共目は涙ぐんでいた。

「宇平がこの場に居合せませんのが」と、りよは只一言云った。

九郎右衛門等三人は河岸かしにある本多伊予守頭取いよのかみとうどりの辻番つじばん所しょに届け出た。辻番組合月番西丸御小納戸にしまるおこなんどうどのきちのじょう鶉殿吉之丞の家来玉木勝三郎組合の辻番人が聞き取った。本多から大目附に届けた。辻番所組合遠藤但馬守胤統たじまのかみたねのりから酒井忠学ただのりの留守居へ知らせた。酒井家は今年四月に代替だいがわりがして

いるのである。

酒井家から役人が来て、三人の口書くちがきを取って忠学に復命した。

翌十四日の朝は護持院原一ぱいの見物人である。敵を討った三人の周囲へは、山本家の親戚おいおいが追々馳せ附けた。三人に鶉殿家から鮓すしと生菓子なまがしとを贈った。

西とりの下刻に西丸目附徒士頭かちがしら十五番組水野采女うねめの指図で、西丸徒士目附永井亀次郎、久保田英次郎、西丸小目附平岡唯八郎ただはちろう、井上又八つかい、使之者志母谷金左衛門ものしもや、伊丹長次郎いたみ、黒鍬之者くろくわのもの四人が出張した。それに本多家、

遠藤家、平岡家、鵜殿家の出役があつて、先ず三人の  
 人体、衣類、持物、手創の有無を取り調べた。創は誰も  
 負っていない。次に永井、久保田両徒目附に当てた口書  
 を取った。次に死骸の見分をした。酒井家に奉公した時  
 の亀蔵の名を以て調書に載せられた創はこうである。「背  
 中左之方一寸程突創一箇所、創口腫上り深さ相知不申、  
 領に切創一箇所、長さ三寸程、深さ二寸程、同所下之方  
 に切創一箇所、長さ一寸五分程、深さ六分程、左耳之脇  
 に切創一箇所、長さ一寸、深さ六分程、右之肩より乳へ  
 掛け一尺程切創一箇所、深さ四寸程、同所脇肩に切創一

箇所、長さ二寸、深さ一寸程、咽突創のど一箇所、長さ三寸程、都合七箇所」衣類は木綿単物、博多帯、持物は浅葱あさぎ手拭一筋である。死骸しがいは玉木勝三郎に預けられた。次に呼び出されていた、亀蔵の口入人神田久右衛門町代地富士屋治三郎、同五人組、亀蔵の下請宿若狭屋亀吉が口書を取られた。次に九郎右衛門等の届を聞き取った辻番人が口書を取られた。

見分の役人は戌いぬの上刻に引き上げた。見分が済んで、鵜殿吉之丞から西丸目附松本助之丞へ、酒井家留守居庄野しょうの慈父じふ右衛門えもんから酒井家目附へ、酒井家から用番大久



保加賀守忠真へ届けた。かがのかみただぎね

十五日卯うの下刻に、水野采女の指図で、庄野へ九郎右衛門等三人を引き渡された。前晚ぜんばん酉の刻から、九郎右衛門とりよとを載せるために、酒井家でさし立てた一挺ちようの乗物は、辻番所に来て控えていたのである。九郎右衛門、文吉は本多某に、りよは神戸あずけに預あずけられた。この日酉の下刻に町奉行筒井伊賀守政憲つついいがのかみまさのりが九郎右衛門等三人を呼び出した。酒井家からは目附、下目附、足軽小頭に足軽を添えて、乗物に乗った二人と徒歩かちの文吉とを警固した。三人が筒井政憲の直じきの取調を受けて下がっ

たのは戌の下刻であつた。

十六日には筒井から再度の呼出が来た。酉の下刻に与<sup>よ</sup>力<sup>りき</sup>仁<sup>に</sup>杉<sup>すぎ</sup>八右衛門の取調を受けて、口書を出した。

この日によりよは酒井龜之進から、三右衛門の未亡人は大沢家から願に依つて暇<sup>いとま</sup>を遣<sup>つか</sup>された。りよが元の主人細川家からは、敵討の祝儀を言つてよこした。

十九日には筒井から三度目の呼出が来た。九郎右衛門等三人は口書下書を読み聞せられて、酉の下刻に引き取つた。

二十三日には筒井から四度目の呼出が来た。口書清書

に実印、爪印をさせられた。

二十八日には筒井から五度目の呼出が来た。用番老中水野越前守忠邦ただくにの沙汰で、九郎右衛門、りよは「奇特之儀きどくのぎに付構なしつきかまひ」文吉は「仔細無之構なししさいこれなく」と申し渡された。それから筒井の褒詞ほうしを受けて酉の下刻に引き取った。

続いて酒井家の大目附から、町奉行の糺明きゆうめいが済んだから、「平常へいじょう通心得べしのとほりこころ」と、九郎右衛門、りよ、文吉の三人に達せられた。九郎右衛門、りよは天保五年二月に貰った御判物ごはんものを大目附に納めた。

閏七月朔日うるう ついたちにりよに酒井家の御用召があつた。辰たつの

下刻に親戚山本平作、桜井須磨右衛門があさがみしも麻上下で付き添  
 って、御用部屋に出た。家老河合小太郎に大目附が陪席  
 して申渡もうしわたしをした。

「女性によしやうなれば別して御賞美あり、三右衛門の家名相続  
 被仰附おほせつけらる、宛行あておこなひ十四人扶持被下置ふちくだしおかる、追て相応むこやうの者婿養  
 子可被仰附しおほしつけらるべし、又近日中奥御目見可被仰附なかおくおめみえおほせつけらるべし」と云うので  
 ある。

十一日にりよは中奥目見なかおくめみえに出て、「御紋附黒縮緬くろちりめん、紅もみ  
 裏真綿添うらまわたそひ、白羽二重一重しろはぶたえひとかさね」と菓子一折とを賜たまわった。同  
 じ日に浜町の後室から「縞縮緬一反しま」、故酒井忠質室専ただたかしつせん

寿院じゅいんから「高砂染縮緬帛たかさご二、扇あふき二本、包之内つつみのうち」を賜つた。

九郎右衛門が事に就いては、酒井忠学から家老本多い意気揚いきへ、「九郎右衛門は何の思召おほしめしも無之これなく、以前いぜん之通のとほりめしいだすべしかつゆきとどきそろだんまんぞくほうびいたすべし可召出めし、且行届候段満足褒美可致あさがみしもくだしおかる、別段之思召を以て御紋附麻上下被下置あさがみしもくだしおかる」と云う沙汰があつた。本多は九郎右衛門に百石遣つて、用人の上席にした。りよへも本多から「反物代千疋たんものだいせんびき」を贈り、本多の母から「縞縮緬一まぜさかなひとをり反、交肴一折」を贈つた。

文吉は酒井家の目附役所に呼び出されて、元表小使、

山本九郎右衛門家来と云う資格で、「格段骨折奇特に附、  
 小役人格に被めしかかへらる召抱、御宛おあておこなひきんよりよう行金四両二人扶持被下置」  
 と達せられた。それから苗字みょうじを深中ふかなかと名告なのつて、酒井家  
 の下邸すかも巢鴨の山番を勤めた。

この敵討のあつた時、屋代やしろ太郎弘賢ひろかたは七十八歳で、九  
 郎右衛門、りよに賞美たままつの歌を贈つた。

「又もあらし魂祭たままつるてふ折せに逢ひて父兄あたらうの仇討あたらうちしたぐ  
 ひは」幸さいわいに太田七左衛門が死んでから十二年程立つて  
 いるので、もうパロヂイを作つて屋代やしろを擲からか揶かうものもな  
 かつた。







日本文学電子図書館

---

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---



日本文学電子図書館